

## 獲得初期段階における未指定の機能範疇：日本語の時制辞と主格の獲得から

團迫, 雅彦  
九州大学大学院附属言語運用総合研究センター

<https://doi.org/10.15017/19617>

---

出版情報：九州大学言語学論集. 31, pp.147-157, 2010. Department of Linguistics, Faculty of Humanities, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 獲得初期段階における未指定の機能範疇：

## 日本語の時制辞と主格の獲得から

團迫 雅彦

(九州大学大学院附属言語運用総合研究センター)

dansako@lit.kyushu-u.ac.jp

キーワード：言語獲得 機能範疇 Tense 主格 未指定

### 1. はじめに

パラメータを機能範疇に限定しようとする近年のアプローチに基づけば、言語獲得はインプットに基づいて個別言語の機能範疇の形態的・統語的特性を抽出・体系化することであると考えられる。母語を獲得する幼児にとって少数の不完全なインプットから個別文法を形成するためには、言語獲得の初期から成人と同質の文法が作用している方が望ましいという考え方がある。これは連続性仮説 (Continuity Hypothesis) と呼ばれており、この仮説に基づけば幼児が発話する文にも機能投射が含まれていることになる (Whitman et al. 1991, cf. Pinker 1984, Lebeaux 1988, Radford 1990)。本論文では、日本語を母語とする幼児が機能範疇 Tense (以下、T と略記) をどのように獲得するかを取り上げ、日本語の獲得も連続性仮説という枠組みで捉えられるかを検討する。もし成人と同様に幼児文法に T があるならば、形態的・統語的な特徴が獲得の初期段階から現れるのかどうか問題になる。そこで具体的には(1)を検討する。

- (1) a. 幼児の発話において時制辞がどのように具現化されるのか。
- b. 主格標示された名詞句が現れるのか。その際、時制辞が現れる時期とどのような関係があるのか。

そのような点に着目した先行研究を概観した上で、形態的・統語的な証拠を基に、本論文では日本語の獲得初期の幼児文法として、(2)を主張する。

- (2) a. 獲得初期に現れる時制辞の範疇素性は未指定である。  
b. T が獲得されるまでは、V はその *sister* に生起する要素に対して意味役割 (theme) を与えると同時にその要素を主格として認可する。

本論文の主張は、言語ごとに異なるとされる機能範疇の特性を獲得するまでは、目標言語とは異なる文法を持つ場合があることを意味しており、その点で日本語の獲得は連続性仮説では説明できないということを示唆するものであるといえる。

本論文の構成は以下の通りである。第二節では T の要素と、それによって与えられていると考えられている主格の獲得について先行研究を概観し、その疑問点を指摘する。第三節では調査で得られたデータを紹介し、本論文における提案を示す。第四節は結語と今後の課題である。

## 2. 日本語における T の獲得研究

T が獲得されているかどうかを検証するためには、まず T の指定を受けける要素が形態的に具現化するかどうかを調べる必要がある<sup>1</sup>。これについては、従来の言語獲得研究でも調査が行われている。例えば Nakayama (1996:63-76) は幼児発話を調査した結果、生後 1 年半程度の段階から(3)のように動詞に *-ta* が接続される形式が現れることを観察している。このことから、Nakayama (1996) はこれらの文には TP が投射されていると主張している。

- (3) a. あった (Yachiyo, 1;6)  
b. ほんかったの (Yachiyo, 1;8)  
c. あいた (Jun, 1;6)  
d. ついた (Masayo, 1;8)

---

<sup>1</sup> 例えば Radford (1990) では、*inflection* が欠落している文として “Man go up there” (Claire 1;11) のような発話を挙げている。このように機能範疇の主要部に相当する要素が形態的に現れない文が観察された場合、その段階では機能範疇が獲得されていないと見なされてきた。

また Sano (1995)は、三名の幼児の自然発話において、時制辞が含まれていない Adverbial (連用形) や Irrealis (未然形) の形式で終わるような発話 (例えば、「水を飲む／飲んだ」ではなく、「水を飲ま／水を飲み」のような発話) は観察されないことを報告している。これに対して、非過去のル形や過去のタ形は生産的に用いられている。

Table 1: Inflection of Main Verbs in Affirmative Root Clauses

	nonpast <i>-(r)u</i>	past <i>-ta</i>	Adverbial	Irrealis
Toshi (2;3-2;8)	288	84	0	0
Ken (2;8-2;10)	111	175	0	1 (0.3%)
Masanori (2;4)	138	50	0	0

(Sano 1995:35)

このように獲得の早い段階から幼児の発話には時制辞が義務的に生起されていることが分かる。もし、T がないのであれば形態的に時制辞が現れないような発話が見られることが予測されるが、実際にはそのようなことは起こらない。従って、日本語においては幼児文法に T が備わっており、それを具現化するという成人と同じ能力を幼児が持っていることが考えられる<sup>2</sup>。

さらに、Tが獲得されていると考えた場合、文構造にはTPが投射され、その結果TPが関与する言語現象が現れることが予測される。この点に関し、時制辞が用いられる時期と主格標示された名詞句が発話に現れる時期とが連動するかどうかを調査した研究がある。

なお、日本語の主格が機能範疇 T による認可を受けるとされるのは、以下のような観察があるためである。(4a)では、補文節の述語「迷惑だ(不快だ)」が時制辞を含んでおり、また、その主語は主格で標示すること

<sup>2</sup> 時制辞が義務的に幼児の発話でも観察されるのは、時制辞の無い形態が日本語では許されないという形態的理由によるためという可能性もある(匿名査読者からの指摘による)。他にも、日本語は語順の特徴上、時制辞が文末に現れるということから、知覚的に認識しやすい要素であるためという可能性がある(Nakayama 1996)。現時点では、時制辞が義務的に現れることに対し、どのような要因が関わっているのかが特定できない。これについては、今後の課題としたい。

が可能である<sup>3</sup>。しかし、一方で、(4b)のように時制辞を含んでいない連用形補文である場合は、主格標示が不可能である。

- (4) a. 花子は [ 太郎の馴れ馴れしい態度 が / を 迷惑 / 不快だと ] 思っている  
b. 花子は [ 太郎の馴れ馴れしい態度 \*が / を 迷惑 / 不快に ] 思っている

(竹沢・Whitman 1998:50, (9))

これは「思う」のような補文節を取る動詞に限らず、「V+させる」「V+てもらう」のような複合動詞においても同様のことが起こる。ここでも補文節の述語は動詞の連用形語幹であり、時制辞は含まれておらず、主語の主格標示はできない。

- (5) a. 花子が寿司を食べる  
b. 太郎は [ 花子 \*が / に 寿司を食べ ] させた

(竹沢・Whitman 1998:48, (6))

- (6) a. 花子が本を読む  
b. 太郎は [ 花子 \*が / に 本を読んで ] もらった

(竹沢・Whitman 1998:48, (7))

以上の観察より、日本語では主格標示のためにTが必要であり、またそれが形態的に具現化していなければならないという仮説が成り立つ。こうした仮説は、言語獲得に対して以下のような予測を生む。

- (7) 幼児発話において、主格標示された名詞句が出現する時期はTが形態的に具現化する時期と同じかまたはそれ以降になるはずである。

これは逆に言えば、主格標示された名詞句は獲得過程においてTよりも先に現れることはないということになる。

---

<sup>3</sup> ここでは「迷惑」「不快」などのいわゆる形容動詞の時制辞を「だ/だった」と考えている。

この点に着目し、上記の予測を検証した研究として、Matsuoka (1999) が挙げられる。Matsuoka (1999)は、幼児の自然発話コーパスから Aki, Kan, Sumihare 三名の主格標示された名詞句とテンス・アスペクト形態素の出現時期を調査した。その結果は、いずれの幼児においてもテンス・アスペクト形態素の方が主格標示された名詞句よりも早い時期（あるいは同時期）に観察された。このことから、Matsuoka (1999)は日本語において主格は T により認可を受けていることが言語獲得の観察資料から示されたと結論付けている。

(8) Usage of tense and aspect morphemes by children (Matsuoka 1999:343,

TABLE 3)

	AKI	KAN	Sumihare
nonpast	1;10,0	2;2,3+	1;11+
past	2;1,17	2;2,3+	1;11+
ga	2;2,22	2;2,3+	1;11+

(+ = the first file in the database)

以上のように、これまでの言語獲得研究では幼児文法に T が備わっており、それによって主格も認可されるというように、成人文法と同質の文法であることが主張されてきたとまとめることができるだろう。しかし、時制辞の後でガ格名詞句が観察されることがあっても、それが直ちに T による認可であるということを示しているかどうかについては疑問が残る。確かに獲得の早い段階からガ格名詞句が産出されることはこれまでも観察されている。例えば、Nakayama (1996)でもガ格名詞句が述語とともに用いられていることを示している。ただし、これらはすべてガ格標示されてはいるが、意味役割は主題 (theme) であり、動作主 (agent) ではない。

- (9) a. ここがいたい (Yachiyo, 1;9)  
 b. おがつくもの (Izumi, 1;6)  
 c. あんよがつめたい (Kayo, 1 歳)<sup>4</sup>  
 d. こえが (=これが) いい (Jun, 1;6)

---

<sup>4</sup> Kayo の発話時の月齢については Nakayama (1996)では明記されていない。

TP が投射されているのであれば、意味役割に関係なくガ格名詞句が生起するはずである。もしそうではなく、主題の意味役割を担う要素のみガ格で標示されるということになれば、幼児文法における格付与は成人文法とは異なるものである可能性が生じる。

また、幼児の時制辞には次のような特徴も見られることが Murasugi and Fuji (2009)によって報告されている。Murasugi and Fuji (2009)は幼児一名の縦断的発話資料に基づき、初期の発話の動詞の形態的特徴を明らかにしている。まず、動詞形態の中でも最初に現れる形式はタ形であり、その後しばらくは他の形式が現れないとしている。最初にタ形の動詞を1歳5カ月で産出しているが、その後1歳11カ月でル形の動詞が現れるまでは、他の形式は生起していない。

- (10) a. ぶーきた（「車が来た」） (1;5)
  - b. たべた（「食べた」） (1;6)
  - c. おちた（「落ちた」） (1;7)
  - d. けいちゃんゆうた（「けいちゃんと言った」） (1;8)
- (Murasugi and Fuji 2009:5, (15))

従って、動詞形態としてタ形のみが用いられる段階が存在しているということである。さらに、その後ル形が観察される時期にはテイル形の縮約形も現れている。

- (11) a. いくよう（「行く」） (1;11)
  - b. おっくあるよ（「お菓あるよ」） (1;11)
  - c. わんわんちゃんしてる（「犬が座っている」） (1;11)
  - d. ぶらんこちてる（「かかしが揺れている」） (1;11)
- (Murasugi and Fuji 2009:8, (21),(22))

興味深いことに、これらと同時期にガ格名詞句が出現することが観察されている。これは、時制辞が現ればすぐにガ格が現れるわけではないということと屈折形式が豊かになり始める時期にガ格が出現することを示唆している。以上から、先行研究の中で観察事実のレベルとしてまだ十分に明らかにされていないことをまとめると(12)のようになるだろう。

- (12) a. 同じガ格名詞句でも、意味役割によって現れる時期が異なるのか。  
b. 動詞に接続される形式にどのような獲得順序があるのか。また、それとガ格名詞句の獲得との間でどのような関係があるのか。

次節ではこれらを明らかにするために調査を行い、その結果を基に、本論文の主張を提案する。

### 3. データとその分析

調査は幼児の発話データベースである CHILDES (MacWhinney 2000) を用いて行われた。対象は Aki, Ryo (Miyata 1992, 1995) の幼児二名である。この CHILDES のデータでは、幼児の発話のみならず、大人の発話やその発話が行われた際の状況も記述されている。このように文脈情報も参照できるため、幼児がどのような意図で発話をしていたかを考察することができる。周囲の発話を模倣したと考えられるものは排除した。

まず、Aki の自然発話について述べる。時制辞についてはタ形がル形よりも早く現れている。

- (13) a. おった (Aki04, 1;08,23)  
b. あった (Aki04, 1;08,23)  
c. ある (Aki17, 2;02,11)  
d. あるよ (Aki17, 2;02,11)

次に、ガ格名詞句は時制辞が用いられるようになってから現れ、これらは主題と解釈される。

- (14) a. ほんがない (Aki22, 2;03,12)  
b. うみがあるよ (Aki25, 2;04,04)

また、Murasugi and Fuji (2009) と同様にこれらガ格名詞句が生起する時期において、テイル形の縮約形が観察された。

- (15) a. のってる (Aki22, 2;03,12)  
b. しんよこ のってるよ (Aki25, 2;04,04)  
c. してた (Aki22, 2;03,12)



d. おちてた (Aki27, 2;04.18)

しかし、動作主と解釈できるガ格名詞句はこれらの発話の後で観察された。

(16) a. あきちゃんがきた (Aki28, 2;4.29)

b. じどうしゃがいきます (Aki33, 2;6.22)

つまり、ある時期まではガ格名詞句が主題と解釈され、次に動作主の解釈が可能になる段階が現れるということになる。しかも、それは単にル形、タ形に限らず、屈折形式が豊かになった後の段階であるといえる。なお、ガ格名詞句が用いられる時期よりも前には、主語に相当する名詞は出現しても格助詞は用いられていない。

(17) a. ぞうさんでた (Aki18, 2;2.14)

b. あ ピアノあった (Aki19, 2;2.22)

次に、Ryo の自然発話についてもほぼ同様のことが観察された。動詞の形態ではル形とタ形が同時期に現れている。

(18) a. ある (r11128, 1;11.28)

b. てるね (r11128, 1;11.28)

c. あった (r11128, 1;11.28)

d. でた (r11130, 1;11.30)

また、ル形・タ形の出現後にガ格名詞句が観察され、それと同時期にテイル形が用いられている。

(19) a. ここがいい (r20125, 2;01.25)

b. これがよかった (r20209, 2;02.09)

(20) a. ミッキーはいつてる (r20111, 2;01.11)

b. こわれてる? (r20111, 2;01.11)

c. ねてた (r20028, 2;00.28)

d. パパばいばいってた? (r20125, 2;01.25)

そして、動作主を担うガ格名詞句はそれらの後で観察された。これも Aki と同様である。

- (21) a. パパがりょうくんあぐる? (r20327, 2;03,27)  
b. サンタがくる (r20404, 2;04,04)

主格が顕在的に現れるようになる前には、格助詞が用いられていない。

- (22) a. でんわあった (r20015, 2;00,15)  
b. まんまるあった (r20028, 2;00,28)

以上をまとめると主格標示に関して三つの段階があると考えられる。Stage I では、時制辞が用いられるようになるが、ガ格は形態的には現れない段階である。次の Stage II では、屈折形式が豊かになりガ格が現れるが、主題と解釈される名詞句に対してのみ標示される段階である。最後に、Stage III では、成人と同様に意味役割の種類に関係なく主格標示がなされる段階である。

- (23) a. Stage I : Non-nominative case marking  
b. Stage II : Morphological nominative case marking as theme argument  
c. Stage III : Morphological nominative case marking as theme or agent argument (Adult Grammar)

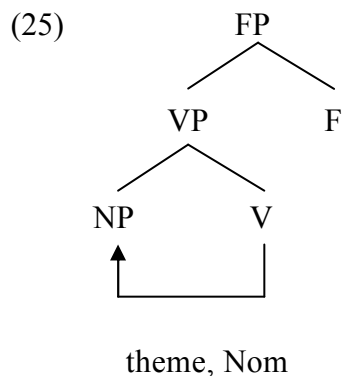
もし T が成人と同様に備わっているのであれば、ガ格名詞句の生起が段階的に行われなければならないはずである。このような発達の段階を捉えるために、本論文では(24)を提案する。

- (24) a. 獲得初期に現れる時制辞の範疇素性は未指定である。  
b. 時制辞の範疇素性が指定されるまでは、V はその sister に生起する要素に対して意味役割 (theme) を与えると同時にその要素を主格として認可することができる<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> ミニマリストプログラムの考え方に基けば、以下のように考えることもできるかもしれない。名詞句が持つ[Nominative]素性は解釈不可能素性であるため Spell-Out の段階までに T により照合される必要がある。しかし、獲得初期段階のガ格が theme 項に限られているのであれば、[Nominative]素性が  $\theta$  素性とリンクさ

形態的には時制辞が早期から現れているが、ある段階までは主格が与えられる名詞句が限定的であることから、範疇素性の T がまだ指定されていないと考える<sup>6</sup>。また、この段階において V が sister となる項に theme と主格を付与することができると考えれば、獲得初期に見られるガ格名詞句の段階的発達を説明することができる。もちろん、T が獲得されれば、日本語の統語的特徴を備えた文法に達するため、主格は T が認可することになる。従って、上で述べた提案は幼児が T を獲得するまでの时限の文法であるということになる。



上述したように本稿では主格標示に関する発達段階として三つの段階があることを述べてきた。それらのうち、Stage I と Stage II は T の指定が行われていない段階であり、Stage III は T が指定されていると考えられる。このような仮定をすることで得られる帰結の一つは、格助詞「が」と「を」の獲得順序である。格助詞「を」は「が」に比べると獲得が遅れる。今回の調査対象であった Aki も Ryo も「を」は「が」よりも遅く発現している。

- (26) a. ここをとおるのは? (Aki47, 2;09,29)  
 b. これをミッキーさんにあげるの (Aki48, 2;10,07)  
 c. タイヤをわれちゃった (r20906, 2;09,06)

---

れており、LF で解釈可能である可能性がある (cf. Fukui and Takano 1998)。

<sup>6</sup> 範疇素性が指定されていない時制辞は統語上何の機能も持っていないのではなく、意味役割 Theme を付与するのに貢献している可能性もある (匿名査読者の指摘による)。未指定の F という範疇がどのような役割を持っているのかは今後の課題としたい。

本研究の主張では、T が獲得されるまでは V が sister となる名詞句の主格を認可するため、結果的に sister に対格を付与するのはそれよりも遅れることになる。この格助詞の獲得順序は、幼児文法と成人文法が同質であるという立場からは説明が難しいと思われる。

#### 4. 結語と今後の課題

本論文では連続性仮説の検証を目的に、日本語の時制辞と主格の発達過程に焦点を置いて機能範疇 T の獲得がどのように行われるのかを検討してきた。その結果、幼児の発達過程を捉えるためには獲得初期から成人文法と同質の文法があるのではなく、成人とは異なる未指定の範疇があると考えの方が適切であることを述べた。ただ、機能範疇 T がどのようにして指定されるのかということについては明らかになっていない。これは今後の課題としたい。

#### 謝辞

匿名査読者の方から、示唆に富む多くの貴重な助言を頂いた。ここに記して感謝したい。なお、本稿の誤りはすべて筆者の責任である。

#### 参考文献

- Bel, A. (2002) "Early Verbs and the Acquisition of Tense Feature in Spanish and Catalan," A.T. Pérez-Leroux and J. Muñoz Licerias (eds.), *The Acquisition of Spanish Morphosyntax*, 1-34. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Déprez, V. and A. Pierce (1993) "Negation and Functional Heads in Early Grammar," *Linguistic Inquiry* 24, 25-67.
- Fukui, N. and Y. Takano (1998) "Symmetry in Syntax: Merge and Demerge," *Journal of East Asian Linguistics* 7, 27-86.
- Matsuoka, K. (1999) "Studies of the Acquisition of Syntax and their Implications for Syntactic Theory," 『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 研究報告書Ⅱ』 331-348.
- Miyata, S. (1992) "Wh-Questions of the Third Kind: The Strange Use of Wa-Questions in Japanese Children," *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* 31, 151-155.
- Miyata, S. (1995) "The Aki corpus -Longitudinal speech data of a Japanese boy

- aged 1.6-2.12-,” *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* 34, 183-191.
- Miyata, S. (2000) “The TAI Corpus: Longitudinal Speech Data of a Japanese Boy aged 1;5.20-3:1.1,” *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* 39, 77-85.
- Murasugi, K., and Fuji, C. (2009) “Root Infinitives in Japanese and Late Acquisition of Head-Movement,” *A Supplement to the Proceedings of the 33rd Boston University Conference on Language Development*, ed. Jane Chandlee, Michelle Franchini, Sandy Lord, and Marion Rheiner. (<http://www.bu.edu/linguistics/APPLIED/BUCLD/supp33.html>)
- Nakayama, M. (1996) *Acquisition of Japanese Empty Categories*, Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Noji, J. (1973-77) 『幼児の言語生活の実態 I-IV』文化評論出版
- Radford, A. (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax: The Nature of Early Child Grammars of English*. Oxford: Basil Blackwell.
- Sano, T. (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*, doctoral dissertation, University of California Los Angeles.
- Shirai, Y. (1993) “Inherent Aspect and the Acquisition of Tense-Aspect Morphology in Japanese,” *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, ed. H. Nakajima and Y. Otsu, 185-211. Tokyo: Kaitakusha.
- 竹沢幸一・John Whitman (1998) 『格と語順と統語構造 (日英語比較選書 9)』中右実 (編), 東京: 研究社出版.
- Whitman, J. B., L. Kwee-Ock, and B. Lust (1991) Continuity of the Principles of Universal Grammar in First Language Acquisition: The Issue of Functional Categories, *Proceedings of the North East Linguistic Society* 21. 383-397.

# **Underspecified Functional Category in the Early Stage of Language Acquisition: Evidence from Tense Morpheme and Nominative Case Marking in Child Japanese**

DANSAKO, Masahiko

(Center for the Study of Language Performance, Kyushu University)

This paper discusses acquisition of Tense category which assigns nominative case to a noun phrase in its Spec. Previous studies have shown that the period of emergence of Tense morpheme precedes that of morphological realization of *ga*-marked subject. This developmental order apparently leads us to assume T in child grammar has the identical property as in adult grammar. However, given our observation that *ga*-marked subject uttered in the early stage can be interpreted only as theme, it is not appropriate to identify T of child grammar with that of adult grammar. Alternatively we present an analysis in which T is underspecified and V assigns theme and nominative case to its sister NP until categorial feature of T is specified.

(初稿受理日 2010年3月31日 最終稿受理日 2010年7月19日)